

文語の苑

メールマガジン第十二号（平成二十四年六月）

脱原発に思ふ

昨年の三月十一日の東日本大震災に際し東京電力の福島第一原子力発電所津波の被害を蒙り大事故となれり。これ千九百七十九年の米国スリーマイルズ原発及び千九百八十六年のソ連チェルノブーリ原発の事故に次ぐ深刻なる災害なり。事故の規模は相似たりと言へど爾後の国の対応著しく異れり。日本政府輿論の激しきに押され、エネルギー政策の梶を大きく脱原発に切り、この夏の電力供給に大いなる不安生ず。

そもそも同時に津波の害を受けし東北電力の女川原発無事なりし事実にも照らしても問題は原発自体に非ずして原子力安全対策にあり。然るに政府は原発そのものを許容し難き危険と断じて全国の原発のほぼ全てを操業停止の状態に置けり。こは正気の沙汰とも思はれず。操業を止むるも原子燃料存する限り危険度は聊かも減せず。一方安全管理のためのコストは引き続き負はざるべからず。原子力発電停止による電力会社の収入減により、このコストをいかに負担すべきかの問題新たに生ず。更に深刻なるは電力供給の不安を感じて多くの企業生産拠点の海外移転を余儀なくせらるることなり。一旦国外に出でし工場元に戻るは至難の業なり。これ即ち大量の就業機会の流出を意味し、決して国民の為ならず。

電力不足を補ふため老朽化せる火力発電所を修復し、再稼働せしむる策浮上す。地球温暖化対策としてこれまで低減に努め来たりし、化石燃料に再び依存せむとするなり。定見なきこと甚し。イラン問題等にて価格高騰の惧れある折柄仮に地球温暖化の問題を差し置きても危険極まりなし。

福島事故の後海外諸国の我国に期待するは、この貴重なる経験を活かして原子力安全の技術を大いに発展せしめ人類社会に貢献するにあり。然るに現状にては若人にして原子力技術を目指す者殆ど無かるべし。

稀に見る大災害なれども、これに対処するには理性を以つてせざるべからず。万事リスク零ということ無し。政治の為すべきはリスクとコストのバランスを冷静に見定むることなり。一時の感情に駆られてリスクを零と為すため国の将来を失ふこと勿れ。大多数の国民同一の感情に制せらるる時一種の抗し難き空気生じ、理性に基づく冷静なる議論極めて為し難し。目下荒れ狂ふ脱原発の空気を見るに、戦前の好戦の空気を思ひ出づるは余のみか。

愛甲次郎

文語の苑

メールマガジン第十二号

小倉百人一首 十二 在原業平

ちはやぶる神代もきかず龍田川 からくれなゐに水くくるとは

在原業平の、この、紅葉の名所龍田川の情景を詠んだ歌については、落語の「隠居の珍妙な解釈を、ご存じの方も多いでせ(しよ)う。最後の句は落語の「水くぐる」ではなく「水くくる」で、「くくる」とは染めることです。歌の意味は、「龍田川に紅葉した落ち葉が一杯に流れ、川が深紅に染まってゐ(い)るや(よ)うに見える。水を深紅に染めるとは、神代でも聞いたことがない」となります。

在原業平は、平安時代初期の天下の色好みで美男子、『伊勢物語』の主人公です。それによると業平は、藤原家の高子姫に懸想し、ある夜駆落ちして、芥川、つまり塵芥を捨てた川のところと連れ出します。深窓の姫君ですから何もかも珍しい。草の葉に夜露が降りて、月光にきらきらと光るのを見て、無邪気に「あれは何なの」と問掛けます。『伊勢物語』には、道の端の蔵に姫を置いて出た隙に、鬼が姫を食ったと書きますが、後から、実は姫の兄たちが姫を連れ戻したものとあります。高子は、藤原家の大切な次期天皇妃候補です。兄たち、つまり後の摂政基経等は、必死に連れ戻したことでせ(しよ)う。

別れが別れだっただけに、業平は思ひ(い)諦め切れず、悶々と日々を過ごしたや(よ)うです。一年が過ぎ、昔のことを思ひ(い)起して詠んだ歌が、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ吾が身一つはもとの身にして」の絶唱です。古今集の撰者紀貫之は、古今集序で在原業平の歌を、「心あまりて」とは「足らず」と評しましたが、その典型のや(よ)うな歌で、「月は昔の月ではなくなってしまうたのか、春は昔の春ではないのか、私一人だけが元の私なのに」との嘆きの問掛けに籠められた哀傷が、胸を打ちます。

業平はこの事件で都に居られなくなり、東国への旅に出ました。東海道を江戸まで下り、業平橋とか、隅田川を飛ぶ都鳥といふ(う)名の鳥に言問うて、言問橋とかの地名を今に遺します。業平の東下りをまとめた次の手遊びをお嗤ひ(い)ください。

はるばると来つる旅かな 遙けくも道は離(さか)りぬ
杜若(かきつばた)にほふ八つ橋 鶯しげる宇津の山道
眼交ひ(い)に今もかかれど かそけくもなりにけるかな
打ち日さす都大路も 人さばに行き交ひし日も
花薫る望月の夜に 相見しは夢かうつつか
一年(ひととせ)の後の夜風に 花散るはうつつか夢か
芥川露光る夜に 相ともに消なましものを
何しかも命ながらへ 東路に恥のみ多き

業平が東国から都に戻って時が経ち、曾ての少女高子は二条后と呼ばれて、後宮の実力者となります。二人は、京都の文化界を指導する立場にあって、互ひ(い)に協力します。二条后の屏風の、龍田川の紅葉の絵に題したのが、この「ちはやぶる」の歌です。

加藤淳平

文語の苑

メールマガジン第十二号

12 主われを愛す（讚美歌461番）

大地震が頻発した安政年間（1854～1860）に、攘夷が開國かの混乱の中、日米和親條約が締結されると同時にヘボン等プロテスタントの宣教師が来日してゐます。明治五年（1872）になると聖書や讚美歌の日本語譯についての會議が開かれ、翌年試譯ながら歌はれた讚美歌が「主我を愛す」です。日本で最初に歌はれた、つまり最古の讚美歌であり、以後多くの日本人に歌ひつがれました。元歌は原詩、作曲ともアメリカ人で、1862年に發表されると直ぐに全米で愛唱されました。日本語で歌はれ始めたのは、近々その十年程後のことになりましたが、日本でも愛唱された根據に、關西辯版や九州辯版などの有ることが擧げられ、この讚美歌から基督教徒になつた人もゐたらつとされてゐます。この歌は日本の舊來の詩型に恐慌をもちました。英語の元歌が七音節（シラブル）から出來てゐて、譯もそれに合せて七音の「七七調」になつてゐるからです。今の諸外國で俳句を、自國語のシラブルで五七五と合せて三行に書くのに似てゐます。

Jesus loves me! This I know, / For the Bible tells me so;

Little ones to him belong; / They are weak, but He is strong.

しかもこれが多くの日本人の心を搏ち、やがて唱歌になり、野口雨情の童謠「シャボンダ玉」にと展開します。讚美歌の出現にあつて、舊來の歌壇、漢詩世界が衝撃を受けました。文藝の方で現れたのが明治十五年（1882）に刊行された『新體詩抄』です。『之ヲ詩ト云フハ泰西ノ「ポエトリー」ト云フ語即チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ』と、古歌でもなく漢詩でもない明治の歌、日本の詩作りを標榜しました。歐米歌詞の直譯による唱歌の流行に對抗したのが宮中の御歌所で、七五調を中心詩型とする保守の立場からの唱歌が作られて、唱歌は、讚美歌に觸發された七七調、新しい試みの八六調、六四調による革新との衝突の火種となりました。

ただ興味深いのは、『讚美歌2』といふ口語譯があらはれるまでは、戦後でも、「歌詞はほとんど全部文語体である。（中略）讚美歌のような内容本意の、概して莊重な、しかも曲に合せてうたう歌を口語体にするには、少くとも現在の國語の実情においては不可能である。」としてゐる事です。口語にしたことで、格調が失はれ、メロデーと合はなくなつたと基督教徒が歎いてゐるのです。

主われを愛す

- 一 主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも 恐れはあらず
 - （繰返し）わが主イエス、わが主イエス／わが主イエス、われを愛す
 - 二 わが罪のため さかえをすてて／天（あめ）よりくだり 十字架につけり
 - 三 みくにの門（かど）を ひらきてわれを／招きたまへり いさみて昇（のぼ）らん
 - 四 わが君（きみ）イエスよ われをきよめて／よきはたらきを なさしめたまへ
- * この歌は文語體ですが、特記することばはありません。

文語の苑

メールマガジン第十二号

照る日の本 愛國百人一首を讀む（八）

平成二十四年五月二十八日

もろこしも天の下にぞあると聞く照る日の本を忘れざらなむ

成尋阿闍梨母

「もろこし」は元々唐を指した言葉で、唐が支配した地方を表してゐましたが、唐土ともまた漢土とも書き、唐が亡びてからも我が國ではそのまま大陸全體を指す言葉として残りました。更に此歌を撰録した新古今和歌集には「成尋法師入唐し侍りけるに」との前置があります。法師自身は寛弘八年（一〇一一）の生れで宋の建國から半世紀を過ぎてゐますから、實際は「入宋」です。「忘れざらなむ」はラ行下二段「忘る」の未然形「忘れ」、打消の助動詞「ず」の未然形「ざら」、希望の終助詞「なむ」が接續して「忘れないで欲しい」の意となります。序ながら「忘れざりなむ」と「ず」が連用形「ざり」となりますと、「なむ」は終助詞ではなく、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」の終止形が接續したものとなり「きつと忘れないであらう」の意となります。文末の「なむ」が未然形に接續してゐるかどうかが判定の鍵となります。

この成尋法師が入宋する時、歌人の母は八十餘歳の高齢で、その別れの悲しみは格別であったこととせう。それは「成尋阿闍梨母集」全二巻に結實してゐます。

この背景を前提に掲出歌を鑑賞しますと、第二句の「天の下にぞ」に重要な意味を感じることが出来ます。即ち、もろこしまでの長い道程と自分の年とを考へれば、もう我が子に二度と會ふことができないのは明らかです。事實、成尋法師は歸朝することなく、彼の地で生を終へることになります。その決定的な別れを、遠いもろこしも同じ天の下にあると自らを納得させようとする親ごころの重みを思ふ時、第四句、「照る日の本」は日本の國と日本に残る母自身とを重ねてゐることに氣附きます。

愛國百人一首の編纂當時、多くの若人が戦地に赴く中で、送り出す父母の氣持は當にこの成尋阿闍梨母と同じであるからこそ、撰者達は「戦意昂揚」要請の中で敢て此歌を愛國の歌として選んだのです。そこには國や肉親への運命的な愛が、古語にいひ、且つ今日なほ沖繩に現存する「かなしみ」の愛であることが見えてきます。

愛國百人一首には唐土へ海を渡る我が子への愛を歌つた歌はこの他に遣唐使使人母の

旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽裏め天鶴群

遣唐使一行の宿を取る野に霜の降る寒さが襲つて來たら、空を飛ぶ鶴の群よ、吾が子を羽根に裏んで暖めてやつておくれ

があり、こちらも使人として宿の夜間警備の役にも出るであらう我が子を氣遣ひ勵ます母の濃やかな思ひが傳はつてきます。

文語の苑

メールマガジン第十二号

てふ

「あいつはなんちユ奴だ」と言ひます。

我々が若い頃、「萬葉集の謎」といふ本がベストセラーになったことがありました。ヒマラヤの山奥に住む「レプチャ」族が、日本語の原形とでもいふべき言語を話してゐて、萬葉集をレプチャ語で解くことが出来ると言ふのです。

その中で、一番笑はせられたのが、レプチャ語には、「チュ」といふ疑問詞があつて、これが、日本語の「なんちユ奴だ」の「チュ」に繋がるといふお話。

今更説明も要りませんまい。著者は、他の分野で一應名を爲した人でしたが、こんな荒唐無稽の論文もどきを世に問うて、晩節を汚したのは残念なことでした。

「なんちユ奴だ」の「チュ」は、勿論、「といふ」が縮まつたものです。

「といふ」が「ちふ(チュウ)」となり、話し言葉では「チュ」になることがあるといふ次第です。

これを、昔は「てふ」と書いて、「チヨウ」と發音してゐました。

小野小町の歌に、

うたたねに戀しき人を見てしより夢てふものは^{たの}持みそめてき

といふのがあります。「夢といふものを頼りにするやうになつた」といふことです。

ten (tetu)のuが脱落して、teuになりました。eはyの撥音になりますから、

「ティョー」となるべきところですが。その「ティョ」が「チョ」に變はるのは、日本語の自然の音韻法則です。

萬葉集では、この「てふ」は「とふ」でした。toihu (toi fu)のiが脱落したのです。もちろん、「トウ(トオ)」と發音されました。

藤原(中臣)鎌足の歌を見てみましょう。

我はもや安見兒^{やすみこ}得たり人みな^やの得がてにすとふ安見兒^{やすみこ}得たり

「安見兒」といふ名の美女の采女を、天智天皇から賜つたときの歌です。「みんなが」手に入れることが難しい』と言つてゐる安見兒を手に入れることができた」と手放して喜んでゐます。

「すとふ」が「するといふ」であることは容易に察せられるでせう。

「といふ」「とふ」「とぶ」「てふ」「ちふ」と變化したのです。

中世によく使はれた「何條」といふ疑問詞もここから派生してゐます。「ナンジヨウ」「(ナンジョー)」と發音するのですが、假名遣ひが「なんてふ」なのか「なんてう」なのか、^なが難しい所です。

といふのは、「條」の字音は「てう」なのですが、「何條」は宛字であり、もともとは

「なんといふ」が縮まつたものだからです。
私は、語源に従つて、「なんでふ」と書くのがよいと思ひます。特に、假名で表記するときには、「なんでう」ではまづいでせう。

源氏物語で、源氏が臙月夜を口説く場面は、源氏の自信の程が一番よく現れてゐます。右大臣の屋敷の廊下を歩いてゐると、或る部屋から女が出て来る。現代に生きてゐたら、性犯罪で懲役八十年と計算されてゐる源氏は、いきなり女を抱きすくめます。女が騒がうとすると、源氏はかう言ひます。

まろはみな人に許されたれば、召し寄せたりともなんでふことかあらむ。ただ、しのびてこそ。

「私はみなから許されてゐますので、人を呼んでもどうにもなりませんよ。お静かになさいませ」

「なんでふことかあらむ」が「何といふこと（どんなこと）がありませんか」といふ反語です。

なほ、鎌足の「人みな」は、「世の中の人みんな」といふ「不特定」を表はしますが、源氏の「みな人」は「そこにある人たちみな」といふ「特定」の全員の事。

さらに、「なんでふ」がそのまま「なぜ」「一體どうして」などの意の、純然たる疑問詞になります。

「なんでふさる事かし侍らむ」（竹取物語）ならば、「一體どうしてそのやうなことをするはずがございませうか」。

中世には、「なんでふ」と單獨で使はれて、「なんといふことを言ふのか。黙れ」といふ、謂はば問投詞になつてゐます。

この「てふ」「でふ」は、平家物語の、那須與一（余一）が扇の的を射る場面でも、面白い使はれ方をしてゐます。ここまで来ると、もう「といふ」の語源は忘れられてしまつてゐるのでせう。

小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し。浦響くほどに長鳴りして、あやまたず、扇の要木は一寸ばかり置いて、ひいッ、ふッとぞ射切ッたる。

「小兵といふ條」は「小兵ではあるけれども」です。ついでながら「十二束三伏」は弓の長さ。体は小さいけれども、長い弓を引く、大力の武士だといふことです。

もつと後世になつても、「〜とはいひ條」といふ言ひ方が残ります。「でふ」と訓むときは、終止形に接続し、「ながら」と訓むときは連用形に接続するのが面白い所ですが、同じものだと考へていいでせう。

文語の苑

メールマガジン第十二号

文語復興運動の裾野

私が文語で文章を書くようになったのはここ数年のことです。ずっと以前から書きたかったのですが、きっかけが無くてその思いを気持ちのどこかに引摺ったままでした。年齢を重ね余裕が少し出て、仕事や家族のこと以外を考えられるようになった頃、インターネットで「文語の苑」に遭遇し、お願いしてその勉強会に出させて頂くことになり、初めて文語の文を書きました。私はインターネットで「文語の苑」の存在を知りました。つまり、全くの門外漢でありました。そんな私を暖かく迎えて下さった愛甲先生はじめ「文語の苑」の方々には深く感謝しています。「文語の苑」がその趣意書にもある通り文語復興を目指していることに大いに共鳴したことも、お仲間に加えて頂くようお願いした理由ですが、本当は単に「自分で文語文、中でも候文を書いてみたい」と思っただけというのが正直なところです。

なぜ、文語文を書きたくなったかは、はっきりしません。また、それを追求するつもりもありません。多分、子供の頃に東映時代劇のチャンバラ映画が好きで、片岡知恵蔵や市川右太衛門の台詞（侍言葉）にてそうろう、というような文語混じりに魅せられたからという程度のものでしょう。

それに加えて、昔の人のように文語で文章を書いたら、他の人とは少し違いを出せて偉そうに見えるのではないか、何となく格好良いのではないか、といった気持ちもありました。つまり、文語文が復興して日本文化の継承に役に立つなら、それは実に結構なことでは無いと思えますが、それら崇高な目的が、私が文語文を書きたい原動力ではなかったというのが事実です。

「文語の苑」には、アカデミックに研究学習され、正統派文語の復興に取り組んでおられる多くの会員がおられます。これら先生方の念願が叶うよう切にお祈りし、出来るものならその下働きをしたいとも考えております。

一方、文化運動というものは新しく出来たスカイツリーのように1本ですくと立つことは出来ないと考えます。むしろ富士山のように裾野が広く、その結果頂上も高い、という姿にならざるを得ないように思えます。専門家でなくとも、あるいは専門的知識を少ししか持たない、更に言えばむしろ浅薄なミーハー的関心を抱くだけの人が混ざっていいようにも、とにかく裾野が広いことが、中心に立つ人の専門性、正当性をより高くすることに繋がると思っています。

私は勉強不足な上に怠け者で、単に文語の裾野の部分に居るのみです。しかし、以上のように考え、周辺に居るだけでも少しは頂点を支えることに役立っていると思うようにしています。そして、またその裾野を更に広げていきたい。裾野が大きくなりそれにつれて頂点がさらに高くなることを願っています。